

## 2 1 世紀の日本のかたち（4）

--- 日本はどのような文明単位か ---



戸沼幸市  
(財団法人日本開発構想研究所理事長)

### 1. 文明の土台としての日本列島の自然

本格的な春、日本列島は梅、桃、桜と花爛漫です。3月、南北に長い日本列島に花暦がめくられて、桜前線が北上し、沖縄、九州、四国と、杉の花粉を交えながらも本州をなめるように覆い尽くして、北海道に至り、5月、北の海へと抜けてゆきます。

緑豊かな森の夏が過ぎ、10月に入ると、桜前線とは逆方向に、北海道から、紅葉の秋が日本列島を包みます。

日本列島の春夏秋冬、豊かな四季が、古来、日本人の生活を包んできました。

日本は海—日本海、東シナ海、太平洋に囲まれております。黒潮や親潮などの寒暖の海流は、日本列島に四季の豊かな気象条件をつくり出していますが、海は古来日本人の食の網、魚類をはじめ様ざまな海の幸を提供してくれます。海はまた森を育てます。日本は森の国、日本文明は海そして森によって育てられたとって過言ではありません。

文明、一定の自然環境（条件）に築かれる人間居住の様式は、それぞれに地球における際立った気候、地理、地形に特徴づけられています。

アジア大陸の東縁に位置し、4つの主要島と4,000余の島々からなる南北3,000kmと長い弧

状列島、日本は38万km<sup>2</sup>は亜熱帯の沖縄、小笠原、寒冷気候の北海道を含みながら、大部分は温帯気候に属し、水と緑の豊かで多様な自然があり、丸ごと可住地といってもよいほどです。

日本列島は自然環境に恵まれています。しかし台風や火山活動、地震危険地帯に位置しています。日本文明史は多く自然災害史と重なっていることは銘記すべきことです。(図1)

### 2. 人口動態にみる日本の文明史

日本列島は有史以来5億人近い人間を居住させ、現在、1億2,000万人を超える人間の生存と生活、諸活動の舞台となっています。

日本人の祖先が日本列島に定住し始めたと推定される紀元前後から数えて、約2,000年、わずかに60世代で数万人から1億人を超えてしまうとは、地球的に見ても特異な一単位の文明圏として位置づけ得るほどのものです。

一定の自然環境に築かれる居住環境の進化は、具体的には人間の発明した諸技術(食、医、エネルギー、情報、制度など)に見合っています。

一連の革命的技術上の発見によって、日本の人口史は大きく三つの時期に区分することができます。

第I期:ある原自然にそもそも人間が出現す

るということそれ自身がまず自然史の中において革命的なことです。と同時に人間自身自らの歴史を作り上げてゆく上で始原的なことです。

日本列島に初めに人類が出現し、この地の自然生態系の中に含まれていた原自然の中の人間の時代、狩猟漁労の孤立的生活圏の時代—いわば自然系時代の人口期。(0〜数万人)

第Ⅱ期：日本列島に初めて農業生産がもたらされたいわゆる縄文・弥生時代に始まり、江戸時代まで。この変革によってせいぜい数十万人台であった人口が百万人台を超え千万人を突破し三千万人(江戸時代)にまでも増加しました。この時代、人間居住として、家、村、町、都市に続いて、国家(首都)という仕組みもつくりだしました。いわば、自然—人間系の人口期。(10万、100万、1,000万〜3,000万人)

これについては農業をベースにした人間居住の最大値を追求した江戸以後とそれ以前の二期に分けることもできます。

第Ⅲ期：日本の人口史の第三の革命点は、動力革命によって一定の生活圏の中に閉じ込められていた人口の枠組みが打ち砕かれて、外に拡大することによって急増加した時期。

日本人は機械(エネルギー、情報)と結びつくことによって広く地球世界とつながるようになり、日常的居住領域、行動領域、情報領域を圧倒的に広げ、経済も地球の隅々まで拡大し、わずか百年あまりの間に3,000万人から1億2,000万人への人口爆発期を経験しました。いわば、自然—人間・機械系時代の人口期。(3,000万人—1億2,000万人)

そして現在ここに急ブレーキがかかり、劇的に人口減少に転じ、日本の人口史は第Ⅳ期に入ったといえます。(図2)

### 3. 日本文明の第四段階(1億2,000万人〜5,000万人?)

縄文弥生に始まる日本の居住史(文明史)は古代、中世、近世と特徴づけられますが、明治以前、江戸時代までは日本列島の自然の小生態圏に見合ったかたちで、居住環境(家、村、町、都市)を創造し、ここをベースに生活を営んできました。その典型として江戸時代の居住様式、主たる300ほどの河川流域圏に“藩”を設定し、1,800万人〜3,000万人の安定的な居住区を300年にわたって持続させることに成功しました。

日本列島は山地75%、平地25%であり、比較的利用の容易な(経済コストの安い)低地、台地、丘陵地を選んで居住地を設定しましたが、明治以降、爆発的な人口増に見合うように、海岸、特に内洋の海岸平野の過剰なまでの利用を行いました。東京、大阪、名古屋などの大都市、巨大都市、そしてこれの連なる太平洋ベルト、巨帯都市は、20世紀日本の文明の典型といえましょう。ここに現在、人、モノ、カネ、情報が集中しています。

対照的に、日本列島38万km<sup>2</sup>の75%の山地(水緑、森林地帯)、平地の農地、農作地帯の経営が問題となっています。日本の自給率(カロリーベース)は40%であり、生存と生活の基本である食について、今後の農業の有り様をどう考えるかは日本のかたちを考える上での基本問題の一つに違いありません。

日本の人口が急速な人口減に向かったことに対する生態(学)的解釈として、機械仕立ての前期文明の過剰な自然の食い潰し、地球の温暖化の原因となっている、CO<sub>2</sub>の排出、これによる環境ホルモンの変化による出生率の自己調整的低下、過密な人工環境における群体と

しての適正密度反応などが挙げられます。

それでは、この人口減少の下げ止まりとしてどのような事態を想定し得るのか、日本における将来人口の適正值をどのように想定し得るかが問題です。

グローバル時代の国の人口の数え方は単純ではありませんが、日本列島における居住人口として、1億人（1967年の水準）か、第二次世界大戦前の水準の7,000万人（1940年）か、5,000万人（1912年）か、江戸期最大の3,000万人か。いずれにしる、地球における人間居住と重ねて、文明の土台としての日本の自然環境の扱いについて改めて見直しが迫られています。これからの生存と生活の様式をどのようにすべきかを考えることでもあります。

日本列島の居住人口を3,000万人、5,000万人とするならば、食糧自給可能な江戸時代的定住圏単位の連合体の姿が想定されます。7,000万人、1億人ならば、グローバル時代を背景に、社会経済などを含めてどのような国家像が成り立つのか。

#### 4. 密住と疎住の融合ーエコポリスの網

一定の自然環境には一定の人口扶養条件（容量）があること、自然の中に生きる人間には何かしら生存の理法と生活の作法が求められていることが明らかになりました。

現在、日本列島における居住様式として、密住地帯（巨大都市、巨帯都市）と疎住地帯（都市、小都市、農山漁村）との肌離れ、経済と生活格差の増大が大きな問題となっています。この格差は地球温暖化をもたらしているCO<sub>2</sub>の排出圏（巨大都市側）と、CO<sub>2</sub>の吸収圏である森と水の優越した疎住地側との格差ともいえます。

最近のCO<sub>2</sub>排出権の売買取引としていえば、

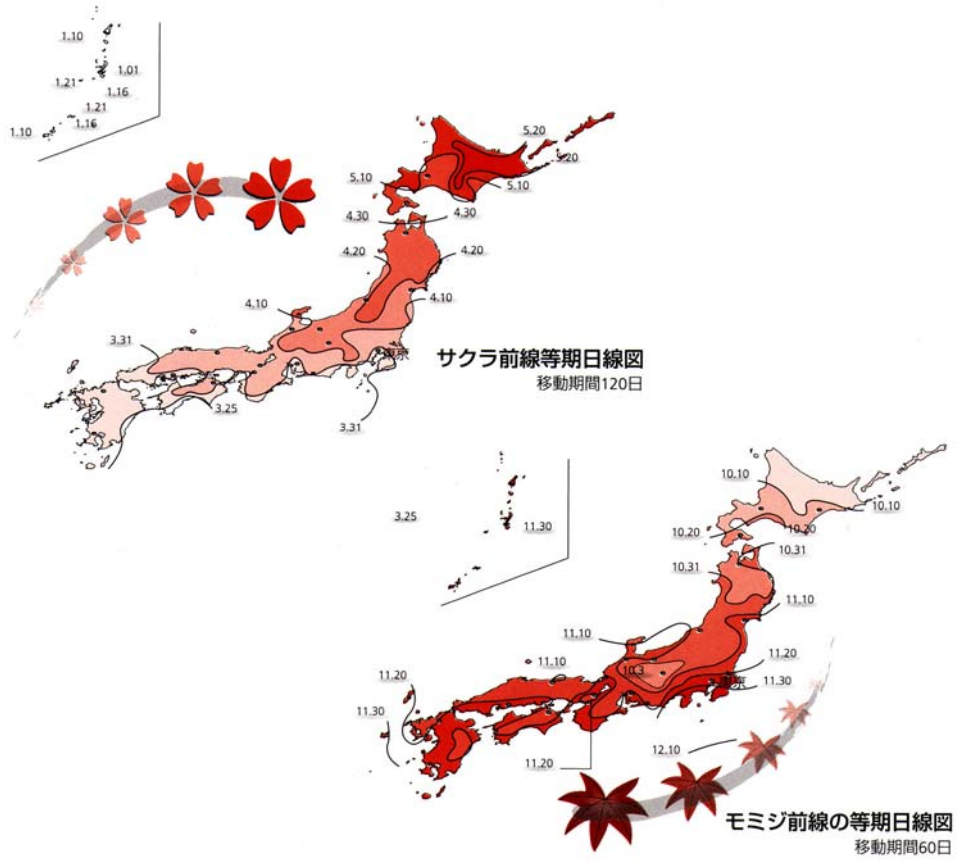
都市側は疎住地側に相当な金銭を支払うべきこととなります。その上で、巨帯都市、巨大都市（東京）といったものも、実は中、小生態圏のモザイクとして見直すべきです。

東京なども子細に見れば地形があり、川も森もあります。海に育てられ、森と水の都市として改革と再生をすべき時です。

人口減少時代、21世紀の適正人口をどのように想定するかは、どのような国土像、国家像を画くかにかかっています。20世紀に築いた機械仕立ての過密な巨大集合を解体し、疎住地との交流、交叉をどのように想定するかにかかっています。

日本の国土にある、本来の中、小生態圏を単位としたエコポリスの網、少子高齢化時代を支える生命の網の目社会をどのように設計するかの中に、21世紀の日本の人口の適正規模と配置があると考えます。

図1 日本の四季



出典:「二十一世紀の日本のかたち—生命の網の目社会をはぐくむ」戸沼幸市編著、彰国社、2004

図2 人口動態にみる日本文明史の区分

